
あの日 番外編

春桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日 番外編

【Nコード】

N83890

【作者名】

春桜

【あらすじ】

あの日 of 番外編です。シリアスからほのぼのまで。シンと心春を中心にやりたかったエピソードを続けていきます！よろしくお願いします。

第一話 S e f i r o t h (前書き)

あの日の番外編です！最初はシリアスです……。お気に入りとかすごい励みになってます！ありがとうございます！なるべくほのぼのしていきたいと思います。

第一話 S e f i r o t h

この世界は生命の樹だ。

人々は生まれ、死に、また生まれる。

生命は儚いけれど根強くはっている。

ここから始まったわけではない。

誰が神なのか。誰が人を生んだのか。

そんなこと誰にもわからない。

唄を知っている。

悲しい唄だ。

けれど綺麗でこの暗闇の中に花を咲かせるように生き続ける。

それが人間だ。

シオン霊王は時の塔の最上階に住んでいる。使用人は下の階に住んでいる。シオンは目を伏せてから、揺るがぬ王座から立ち上がった。かつてウルキオラが眠っていたベットに今は愛しい女性が眠りについていた。

まるで死んでいるように眠る彼女の顔は美しくこの世のものではな

いかと思われた。美しいと思うことは人それぞれ。これが最高に美しいと思えるのはシオンだけかもしれない。いや。そんなことはない。フィーリは誰よりも美しい。

シオンは雨が降り続けている外を見た。窓を開ければ雨が入る。シオンは窓に触れ、この世界全体を見渡した。この世界はこの王都と呼ばれるところしか人間つまりは王族が住んでいる。ほかは何もなく荒涼としていて魔物が住んでいるらしい。

魔物というのにも確かなものだが信じられているのはソウルソサエティで罪を犯した死神または魂魄が消え、亡くなった時この世界に来るという。

とこれはシオンの考えなのだが。

「うつ・・・。」

フィーリが疼いている。シオンがそつとベットに近付くと彼女は流れ星のような涙を流していた。すぐに消えた涙をシオンは愛しく思った。

「フィーリ。」

シオンは優しく笑った。

目を開けたフィーリはその瞳に恐怖を画しきれず目を見開いていた。

「シオン様・・・。」

彼女の唇も全て冷たかった。見るからに。

シオンは何も言わず温かいコーヒーを渡した。

「ありがとうございます・・・。」

フィーリは素直に受け取った。

「体調は。」

「私が倒れたのは体調のせいではありませんから・・・。」

呟くように言う彼女の声は風邪の日のようにかすれていた。

「では聞いてもいいか？」

「何でしょうか。」

「君は俺が嫌いか。」

「！」

フリーリは驚いてからきつと睨んだ。

「そんなこと……！わかってるはずではありませんか！」

「わからないから聞いたんだよ。」

薄く笑ったシオンの目は輝いた。

「私は……。」

「はつきり言ってくれ。俺は答えを出せる。」

「何故ですか？時は進んだだけ。何も変わっていない。先ほど見つけれなかった答えが今見つかるか？」

「ああ。俺は夢を見たんだよ。」

「夢？」

「如月椿……。エミール・オーヴェット。彼女の夢を。」

「どんな夢です？」

シオンは遠くを見つめ語り始めた。

「あいつは俺と同じだった。希望もなく生まれ、生命の樹に囚われ、幸せを知らない。けど今は幸せだと。あいつの幸せとは？俺にわからなかった。けど彼女が話してくれたよ。」

「……。」

「永遠は苦しく悲しいものでしかないと思ったけど、望んでいる人がいる。そう考えたら自分は幸せだった……。と。」

シオンは嬉しそうに笑った。

「俺は彼女の笑った顔を見たよ。それを見たら俺は世界が素晴らしく思えた。俺は望めば破壊できる。けどそれをしないのは……。わかるよな？」

フリーリは頷いた。

「きつと君は俺がどんなに愛を囁いたとしても君は微笑んでくれないだろう。君は俺を殺すことしか頭にないから。」

「そうですね……。はい。私は貴方を殺します。絶対に。けれどそれを考えないことはできない。そう運命で決められている。

この世界と作った神が。貴方が。私の父と母が。貴方は……。」

「この世界の神です。貴方はこの世界に人間を生んだ。先ほど消えた人が動き始めた。」

シオンはこの世界に一人生まれた。ソウルソサエティと現世とウェコムンドを守るために。神は人間を生む能力をシオンに与えた。シオンが望んだ人を生むことができる。

けれどシオンは考えることが辛かった。けれどさびしかったから人間を思い描き生んだ。

しかし不思議なのだ。人間というのは。シオンが望まない性格や容姿、心まで生まれてくる。シオンが支配できるはずなのに。その中で支配できない。消すことができない人間がフィーリの一族。

先ほどフィーリが泣いていたのはその瞬間人が消えたから。

メディアやウラノス……。シオンの親しい者までシオンは消した。それがフィーリにとっての苦しみだった。

「私は貴方を愛しています。けれど憎んでいます。これが私の思いです。」

彼女の微笑みは女神のようだ。女神なんか存在しないだろうが。

シオンはフィーリを抱きしめた。

「もう……。何もかも投げ出して君に殺されたいよ。」

それは切なる願いだった。

永遠に続く愛を人は望むだろうか？

今。俺は彼女と生き続けたいと思った。

彼女は消えない。俺が死ぬまで。

なら生きよう。

苦しい。悲しい。

そんな思いもしなくていい世界ができればいいな。

第二話 M a n t r a (前書き)

やりたかったバレンタインwww

第二話 M a n t r a

ソウルソサエティから帰ってきたシンと心春と黒崎は平和な生活を送っていた。虚にも襲われることはなく、死神にも命を狙われることもない。シンが求めた生活が戻ってきた。

雪花はシンに何も追求せずただ無事ということを確認すると涙を流していた。

雪花の涙を見たことが初めてだったシンは驚き何も言えなくなったが雪花はいつも通りにふるまってくれた。シンも安心し、ポツリポツリと体験したことを話し始めた。

雪花はうんと頷き全て信じてくれた。

いつも通りの生活が続いている今日この頃。そして今日は2月14日。

「うー。マジ2月14日死ぬよ。マジいいよ。」

雪花は朝、シンと一緒に登校した。シンは心春に先に言っておいてくれと言われ先に出ていったところに雪花とあった。雪花はげんなりしている。

「貴様……。なんだその顔は。」

「何だよ。お前はいいよな。もてるもんない。もてない男子は辛いんだよ。ていうか日本人って馬鹿？こんなのお菓子会社の陰謀だぜ？女の子にチョコ買わせて自分のとこの利益優先だよ。はあ。」

雪花はかつてこんな姿はしていなかった。情けない。

「別に気にしない女もいるだろう。俺はチョコレートなんか要らんが……。心春はこの日しか作ってくれないからな。それは嬉しい。」

ほのかに顔を赤くしているシンは雪花が見ても男前で可愛い。かわいすぎる。

（ウルさんも……。こんな顔してるんだろうな。）

あれだけ似ているシンとウルキオラだ。織姫にデレデレのウルキオラの顔が思い浮かぶ。

「お前の顔見るとまた落ち込む。ていうかさ。お前自覚してる？」

お前、あの学校でアイドル的存在なんだぜ？」

「はあ？アイドル？」

（ぜってーわかってねえ。コイツ。）

雪花は内心舌打ちした。雪花は知っている。ていうか知らないはずがないのだ。

まず。だいたいの奴は中学の時に付き合ったりと……。いろいろな奴がいるが、とにかくシンは顔もイケメンだし、学力もいい。一番というわけではないが（一番だったなら雪花が同じ高校に行けるはずがない）運動は全国でも一番だろう。そんな完璧ならもてないはずがない。

現に今は休み時間はものすごい女子の視線を感じるし、馬鹿な奴は

どつからでも湧いてくるし。靴箱にたくさんの手紙が入っていて、シンが「何だ。ゴミがこんなに入っていたか。」とか言って全部捨てたのも。ファンクラブが結成されてたり、プロマイドが一枚500円で売られていたり（雪花にも依頼が来たことがある。ちなみにほとんどの写真は雪花の一部がはいつている。腕とか。）

とにかく一緒にいて自分が見じめだ。いやもてても付き合う気はないが。こう男としてモテ期というやつを味わいたい。

「何か知らんが。貴様も女子に人気があるだろう。」

「はあ？俺が。どしてー。」

シンは知っている。雪花は……。優しい。女子にも親切にしたり男にも人気がある。確かに中学の時は皆が恐れていたからチョコどころではなかったが雪花は人気がある。

「・・・・・・・・。」

シンはもうめんどくさくなって答えなかった。

「女の子ってどうしてこんな日じゃなきゃ告白できないんだろつな。」

二人には乙女の気持ちは到底わからなかった。

（できた！）

心春はラッピングが完成し満足そうに微笑んだ。

「早くいかないと遅れるよ。」

「あ！お母さん！見て見て！」

心春は織姫にラッピングしたチョコ見せた。

「よくできてるわね。私の子なのに心春ってすごい。」

織姫は心春に抱き着く。

「お、お母さん……。私行かなきゃ……。」

「あ。ごめん。ねえ。お父さんには？」

「ちゃんと渡すよ！帰ったらね！じゃ、行ってきます！」

心春は家を出た。

（今日は特別な……日。）

バレンタインデーだから。彼に思いを伝えよう。

心春は嬉しそうに走って行った。のちに起こることも予想せずに。

第二話 M a n t r a (後書き)

何か起こるのかな。別に思いつかないのに・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8389o/>

あの日 番外編

2010年11月16日01時30分発行